

◆「恵みの導き」 小野慈美

このスピーチを準備するために自分のこれまでの歩みを振りかえり、気付かされたことをお話ししたいと思います。それは、神の導きは、人との〈出会い〉、〈御言葉〉、〈状況〉を用いてなされるということでした。私の父小野一良(いちろう)は、1951年秋～1955年春まで3年半、瀬戸内海の福音丸牧師をしており、その時期に私は広島県因島(いんのしま)で生まれました。1955年に、父が茨城県の潮来(いたこ)町で幼稚園を併設する教会の開拓伝道のために招聘されたので、私は2歳から18歳まで潮来で育ちました。

【ICUとの出会い】

1971年春、大学受験に失敗し、お茶の水の予備校に通いました。そのとき通っていた練馬区の教会に鎌野善三さん(16期)〈出会い〉がおられました。鎌野さんのお誘いで、まだ浪人中の11月にICUキャンパスを訪れ、「しゃろうむ」という聖書研究会に参加しました。高3の時にはその存在さえ知らなかったICUに翌年4月に入学したのも鎌野さんとの出会いがあったからです。入学後すぐに「しゃろうむ」に加わりました(「しゃろうむ」の交わりは今でも続いており、年に一度Reunionをしています)。同時に、鎌野さんが入っていたティラナスホールという学生寮に入りました(この学生寮を作ったCorwin宣教師〈出会い〉の勧めで、後にアメリカのFuller神学校に行くことになります)。入学後、古屋安雄先生のadviseeとなり、オープンハウスに招かれたのですが〈出会い〉、これが、やがて大きな意味を持つことになります。

【献身のきっかけ】

1974年のC-Weekに無教会の高橋三郎先生が来られました。その講演を直接お聞きすることはできなかったのですが、後日、その講演記録を読みました。その最後に記されていた「この若者たちの中から、伝道者として献身する者を起こしてください」という祈りの言葉がとても心に残りました。しかし、身近に伝道者としての偉大な父の姿を見て育ちましたので、自分にはとても無理だと思っていました。そこで、「献身しなくとも良い」と確信させてくれる聖書の箇所はないものかと探し始めました。(ちなみに私は2年間留年したので、6年間ICUに在学しました)。大学4年の秋でした。「あなたはどこにいるのか」(口語訳 創世記3:9)という箇所を読んだときに、「捕まってしまった」という思いがしました〈御言葉〉。この御言葉が、「私が呼んでいるのはわかっているだろう。無駄な抵抗はやめておとなしく出て来い」という神からの抗しがたい言葉として聞こえてしまったのです。不承不承の消極的な献身でした。「神様、もし、私が伝道者として失敗しても、知りませんよ。」そんな思いました。

【神学校入学から潮来教会牧師まで】

潮来教会は日本バプテスト同盟に加盟する教会で、この教派の献身者の多くは、関東学院大学の神学部で学んでいました。ところが学生紛争のため、神学部が廃部になってしまいました。どの神学校にいったら良いのか迷っていたときに、たまたま古屋先生とお話しする機会がありました。先生の「迷う必要ないじゃない。東神大行ったらいいよ」という一言。これ

で決りました。

東神大入学が決まると、並木浩一先生＜出会い＞が声をかけてくださり、先生のもとでICUの非常勤助手を4年間務めました。貧乏学生のための経済的支援の意味があったのだと思います。その時期に、並木先生から多くのことを学びました。その一つは、「忍耐」ということです。白黒つけられないことがあるときに、グレーであることに耐える。そして、どうしても難しい判断をしなければならないときにも、自分は神ではないことをわきまえ、神を畏れながら決断するという態度です。また、こんなこともありました。先生と二人だけでいるときに、先生の抱えておられる問題を一神学生に過ぎない私に分かち合ってくださいました。話し終わった後、「小野くん、祈ってください」と言われました。私は、自分が日々祈るときにそのことを覚えてほしいという意味だと思ったのですが、「いや、今、祈ってほしい」とのことでした。大先生を前にして、私は、たどたどしい祈りをしたことを覚えています。このことを通して、弱さを持った一人の人間として神の前に立つ信仰者の謙虚な姿を学びました。

東神大卒業後、横浜にある搜真バプテスト教会の副牧師、付帯事業の搜真幼稚園主事として4年間働きました。その後、アメリカのフラー神学校に留学し宣教学を学び、留学を終えたら日本のどこかで開拓伝道をしたいと思っていました。ところが、留学中に父が脳梗塞で倒れたため、潮来教会からSOSが届き帰国、その後、正式に潮来教会牧師、潮来幼稚園園長として招聘を受けました。もし、父が倒れなかつたら、他の道を歩んでいたことでしょう＜状況＞。

【再び横浜へ】

潮来教会牧師となって8年後 1999年7月27日、朝の祈りのとき、「**あなたは生まれ故郷父の家を離れ、私が示す地に行きなさい**」(創世記 12:1)という言葉が自分に強く語りかけてくるのを感じました＜御言葉＞。その後、大学のチャップレンや、他教会の牧師としての招きが幾つかあったのですが、神からの導きだという確信はなく、このままずっと潮来にいることになるのかなとも思いました。

11年後の2010年の夏、日本バプテスト神学校の校長と搜真バプテスト教会の主任牧師の招聘の話が、ほぼ同時に、それぞれ全く独自に来ました＜状況＞。この二つは横浜にありますので、「私が示す地」とは、「横浜」なのではないかという思いが与えられました。潮来では強い慰留がありましたが、しばらく祈って、この二つの招きを神の導きと信じ、2013年4月に横浜に移りました。それから10年目を過ごしています。

潮来教会も搜真バプテスト教会も、たまたま幼稚園を併設しています＜状況＞。自分としては幼児教育に重荷を持っていたわけでないのですが、神奈川県にはキリスト教主義の保育施設がたくさんあるからでしょうか、最近は、保育者のための研修会講師をよく依頼されるようになりました。また、キリスト教主義学校の特別礼拝や修養会などの講師にも招かれます。これらも「横浜」に来たことの意味なのかなと思っています。

ICUに入学してから50年、伝道者となって40年。献身の原点がICUにあったことを改め

て思わされ感謝しています。

◆「神様によって建てられた学校で働くものとして」 三河悠希子

私は長崎にあるキリスト教学校、活水高等学校・活水中学校で宗教主任として働いています。0歳と2歳の2人の男の子を育てながら、学校で牧師として働き、忙しい仕事と育児でへとへとにはなりますが、神様と教会の祈り、学校の同僚、生徒たちに支えられながら、楽しく働いています。こんなに素晴らしい仕事を与えてくださるなんて、神様は私のことがきっと大好きなんだろうと勝手に思っています。

私に神様が託された役割は、「生徒が神様に出会うための手伝い」「教会と学校をつなぐ働き」だと思っています。まず、生徒が神様と出会うための手伝いですが、キリスト教学校と言ってもクリスチヤンは多くありません。入学式で初めて、聖書の御言葉を聞き、神様について知る生徒がほとんどです。最初に神様を紹介できるなんて、こんな素晴らしい仕事は他にないと思っています。そんな生徒たちと一緒に毎朝の礼拝や聖書の授業を通して、聖書の御言葉や神様を紹介していきます。「神様はね」と話をしても、最初から素直に聞いてくれる中学生高校生は多くはありません。それでも、私自身が神様に愛され、神様と主に生きることでどれだけ喜んで毎日を送っているか、礼拝や授業だけでなく、部活や行事、掃除いろいろな学校生活を共にする中で伝えています。誠実に生徒と向き合うならば、生徒も誠実に私の言葉を聞いてくれています。

また、教会と学校をつなぐ働きについては、生徒の一生に関わる働きです。生徒がどんなにかわいくても、短いと高校の3年間、長くとも中学から大学までの10年間しか一緒にいることはできません。その後の人生は生徒自身が歩んでいかなければいけないです。その後の人生の方が困難もあり、厳しいです。人生の中で困難と出会った時、希望を失った時に、私たちを必ず導いてくださる神様を知っていてほしい、教会に行ってほしいと願っています。でも、教会のドアを開けて中に入るのは、1度も教会に行ったことのない人にとって簡単なことではありません。だからこそ、いつか教会に行きたい、そう思った時に、教会のドアを開けた先に、安心して神様の御言葉を聞ける場所があることを知っていてほしいのです。中学高校時代に、教会出席日だから仕方なくと思いながらも教会に行ったことがあれば、教会のドアの先に安心できる場所があることを知っていて、教会のドアを開くことができます。この教会出席日には地域の教会の協力してくださっています。長崎県内の生徒が通ってくる範囲内には25のプロテスタント教会がありますが、毎年生徒修養会にはそのほとんどの教会から牧師先生や長老が来てくださり、クラスでの交わりの時を持っています。地域の牧師先生方みなさんとお互い顔を知っていて、電話やメールで連絡をとったり、生徒の様子について話したり、お互いの家族のことについて祈ったりする関係を築けていることもとても感謝しています。そんな地域の教会の協力で、教会出席日は成立しています。

ICUは多くのクリスチヤンの祈りによって建てられた学校です。私はそのICUを卒業したことを誇りに思っています。ここで学んだことを生かして、私に託された生徒たちのため

に精一杯伝道したいと思っています。